
鏡界の境界

嵐風嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡界の境界

【Nコード】

N1155F

【作者名】

嵐風嵐

【あらすじ】

主人公はふとした事から別世界・鏡界へと足を運ぶ。空船と呼ばれる場所で鏡士として生きる事になるが……？鏡界で待つ、『相棒』、彼らの行く末――。そして死んだはずの弟が鏡界に来ていた？鏡界の秘密とは？

第一話「不審な鏡」（前書き）

どうも、嵐風嵐ランフウオロシです。

以前の自分のブログで公開していた小説をここに載せます。……も
っと多くの人が見てくれたらなーっと思いました。早く続きが読
みたい！ という人はブログへGoです（いるかどうか分かりませ
んケド）

どうぞお楽しみください……。

第一話「不審な鏡」

——ここはどこだ？

それに何だこの寒気……え？ 違う。な……何だ？

周囲は全て灰色……この世じゃねえ……こんなの……

っ！ この感じは……。心が裂けていくようなこの感覚……違う、
感覚じゃ——

バサッ。

唐突にオレは起き上がった。

「はあ……はあ……はあ」

ゆ……めか。くそっ、久しぶりに気味が悪い夢見ちまった。

外は明るい。もう朝か。

オレはベッドから降り、洗面所に向かった。

洗顔、歯磨き。いつもの作業だ。

——は？

「か……鏡だよな？」

ゴシゴシと手で擦ってみるが変化はない。

どうして鏡に何も映らないんだ？ 映っているのは灰色だけ。全

面。影も光沢もない。一面灰色。

「——！」

オレの脳裏に一つの光景が煌く。——今朝の夢だ。オレの回りは
全て灰色。心が裂けるような感覚。まるで、「死」——。

オレは本能的に鏡だったものを手で触ろうとした。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

ハッとおレは後ろを振り向いた。声の主は妹だ。鏡をもう一度振
り返る。

元の通りだ。

「いや……別になんでもねえ」

クソ…マジでオレの頭が故障し始めたみてえだ。寝ぼけたにしてはひどすぎる。明日くらいに精神科に行くべきだ。その後不信にかられながらオレは洗面所を後にした。出るときにもう一度鏡を見てみたが、何もなかった。

朝食を食べ終え、部屋に戻る。床に寝転がってふと携帯を見る。今日は八月十五日。世間じゃあお盆の最中だな。オレの家じゃ、親戚の都合がどうかで一昨日までに済ませた。

「……………」
にしても…なんだったんだ。朝のアレは。単なる幻覚か？ まさかな。それとも、いや、それ以外に考えられねえ。そんな非現実的な事…。

ああ！ だめだだめだ。くそっ、ついあの事を考えちまう。あの事を考える度に背筋がぞくつとする。考えてる最中は何にも感じないが、ふと気づくとこれだ。

オレは起き上がり、携帯を開けた。メールを打つためだ。「今から会わねえか？」。そんな文面を友達に送る。

『スマン。今ちよつと家の用事で無理だわ。また今度にしてくれ』
ちっ。次だ。

『あー、だめだ。今日は。明日は？』

明日は無理だ。もう、次だ。

『残念でした。今実家w』

どいつもこいつも忙しいな。…まあオレが暇だというのもあるが。仕方なくオレは一人で外に出る。

夏。

そう感じさせるこの青空とBGM。BGMつつつても、セミの鳴き声が主だが。

オレは行く当てもなくとりあえず本屋に向かった。

「ちっ……………」

今日はついてねえ。『十日〜十六日閉店します。ご了承ください』

か……。なら、ゲーセンか？ いや、今のオレにやあダメだ。そうか。

あそこがあつた。工事現場……ずっと忘れられたあの工事現場がある。記憶が正しければあそこは地下つきのビルが建つ予定だったな。今はどうなってるか知らんが。とにかく、あそこに行ってみるかねえ、な。

「やっぱり」

ここだけはオレを見放さなかったようだ。オレは幕を潜り抜け、掘るだけ掘ってある大きい窪みに下りる。ふふん。上手い具合に足場が出来てやがる。が、予感はしてたんだ。予感ほ。

「な、何だよ……」

どういうこつた。何で、ここに鏡がある。というか落ちている。まっさらに、きれいなものが。

第一話「不審な鏡」（後書き）

次回予告：次回、主人公衝撃の…！

第二話「再び」

オレは立ちすくむ限りだ。

あり得ねーって。なんでここに鏡があんだよ。

くそつ。誰か落としていったのかも知れないが、今のオレにはそんなこと考える余地もない。

オレは脱兎のごとく駆け出した。地上に這い出て、家に向かって走り出す。

家に飛び込むと朝同様妹が変な目で見てきた。

「お兄ちゃん、朝から変だよ？」

「ハハハ…そうかもな」

笑っては見たが顔が引きつっている。

オレは昼飯と夕飯以外、部屋から出ずにゲームやら漫画やら小説やらを読んだりして過ごした。引きこもり寸前である。妹が何度扉を叩いたがオレは無視。無視。虫のごとく無視。もう部屋の中も蒸し蒸ししている。今クーラーぶっ壊れてるんだよ、まったく。

不思議なことに鏡のことは何も考えずに過ごせた。ふうむ。やはりあれは錯覚か？ 錯覚どころでは済まされず、もはや「幻覚」をも通り越しているだろうと思われる今日の出来事。はて、謎である。ちなみに、昼飯とか夕飯の前に手を洗いに洗面所に行ったが鏡は普通の鏡だった、はずだ。ああ、そうだった。そうそう。普通の鏡だ。普通の。……多分。

んでもってその翌日！

トウデイはなぜか知らんが塾。っち。補習なんざこんなお盆の最中に呼ぶなつての。…まあオレは暇だったんだが。

鏡も至って普通。平静を保っている。

でもなあ、そんな頃に限って何か起こるんだよ。

で、そうだった。

予想どうりの結果といやあそうだが。恐いのなんの。

時はその日の夜。所はまたもや洗面所。

あの時と同じ、一面灰色光沢ナシ。

何度目を擦ってみても同じ。なんら変わらない。

もう一度擦ろうと鏡に触ろうとした時、起こる事は起こった。後から思えばコレも運命だったのか――？

オレは手で鏡を触ろうとした。

「――」

言葉は出なかった。出せなかった。出したくても、出ない。

手が鏡に埋もれている。

このときのオレはこんな事を考えてはいられなかったが――たとえるなら、泥に手をつ突っ込んだみたいな感触だ。

ハッと気づくと周囲は灰色の世界。オレはぐるりと周りを見回した。

――ここはどこだ？

それに何だこの寒気……え？ 違う。な……何だ？

周囲は全て灰色……この世じゃねえ……こんなの……

っ！ この感じは……。心が裂けていくようなこの感覚……違う、感覚じゃ――。

「どうしたのお兄ちゃん。ホントに……大丈夫？ 今日ばもう寝たら？」

妹の声でオレは現実引き戻された。妹はまじまじとオレを見つめている。オレは恐々と妹から目を離し鏡、そして我が指を視線で何度もたどった。しばらくした後、妹が去っていく音が聞こえた。オレは生気のない目で鏡をじつと見ていた。そう、漫画で言うなら「目が死んでる」っていう状態だ。……もちろん、そんな事考えられなかったが。

そしてオレはその場に立ち尽くした。

これは……何かの伏線――？ まさか……な……。

第二話「再び」（後書き）

次回予告：主人公、人生最大の決断……！？

第三話「窮地……！」

そんなこんなで立ち尽くす数分間。

あの時の感覚だ……あの時みた夢……！

それを考えられるようになってからオレは洗面所から逃げ出すように自室へ戻った。そしてオレは布団へ潜り込み、寝ようとした。

が、無論、寝れない。あの夢がまざまざと記憶に蘇る。それを思い出せばもはや眠れない。しかも鏡に埋まっていく自分の指……！

あれは……一体？ 今なら分かる。あの感覚は……『死』の、感覚なのかもしれない。『死』？ 『死』だ。

ここでオレは冷静になつてみた。

『死』んだら『死』んだことも分からないんじゃないのか——？

そう思つた。なぜつて？ 『死』んだら考える事も出来ないだろう？ 『死』ぬ直前に何を考えていたつて『死』んだら何も分からない。それに、『自分』という存在すら分からなくなる……。

ええい、止めた。何考えているんだ、オレは。夢のない事は言つなつてんだ。……くそ。

さてその後、オレはほぼ一睡も出来ず、日の光を浴びる事になった。まあ、今日は何にもねえから、寝てても大丈夫だと思うが。あ、寝れないんだつた。

結局、なんだつたんだ。今洗面所に行つても何も起こらなかった。ホント分からん。

あー、くそ。確か本屋、今日は空いてるな。漫画……でも買うか。そのついでにコンビニ行つて雑誌でも立ち読み……だな。まあそれくらいでとりあえずいいか。

そんなこんなで夜になつてしまった。幾度となくあの事を思い出してはそれを払いのけながら過ごした今日。

オレは妹に頼まれ夜のコンビニへと出向いていた。こう、夜の街を歩くつてのは嫌じゃないな。ここは幹線道路から離れてる静かな住宅地だから、静かだしな。

さてコンビニを出ようとしたところで、一人の男にぶつかった。

アレだ。よくある肩同士がドン！つてあたる感じた。

オレは「スミマセン」と言って去ろうとした。が、ソイツはただ者じゃあなかった。

「おい」

とオレの肩を掴んで話しかけてきた。瞬間、冷や汗が全身の毛穴から噴き出した。あ、これってやばくね？——と、思った時、オレはグイとその男に引き寄せられ、男側に向かされた。

オレの思考能力は一瞬でパニック状態へと方向転換、突っ走っていったようだ。

「えっ……？」

と漏らした時、オレの視界に入ってきたのはコンビニの電気に光る、銀白色の、ナイフ。

あ、だめだ殺される。

と思ったがやはり死ぬのは嫌である。あんな事を朝っぱら考えていたにも関わらず、人間そういう場面にぶち当たったらだめなんだよ。……と、いうのも後になってから思う事である。

男はナイフを構えながら、オレの肩をムンズと掴みながらコンビニへ入っていった。どうやらコンビニ強盗らしい。それくらいはあの時のオレでも理解は出来た。

「金、出せ。でなきゃコイツを殺すぞ」

……。今の台詞聞いたかよ。

オレ、マジでガチで本当に殺されるっばいよこの展開。店員は目を白黒させて「あ……」とか「え？」とかを小声で連発しながらオレと男を見ていた。

「おい」

汗が本格的に出てきた。まさか自分が……こんな目に遭うだなん

て。くそつ。どうにか逃げられないかとオレは視線でまわりをたどり始めた。

と、それで数分間。男はオレにも目を離さずにいる。もう一度店員を脅す。店員も殺すと言い出した。

「あと十秒数える。その間に出さないとこいつを殺す」

——え？ オレは超特急であたりを見回した。首筋にナイフが光る。

「くつ……お……らァ！」

オレは男を力づくでけり倒し、店を出ようとした、その時。

窓が灰色になっていた。映るはずのオレの姿がない。オレはバツと後ろを振り返った。男はものすごい形相でオレを睨んでいた。男がオレに向かって走りだす。それと同時にオレは一瞬の思考を開始した。

昨日、オレの指は鏡に入り込んだ。殺されるよりマシだ。指が埋もれたんだったら、体だって全部入るだろ……。なぜか確信できる。オレはふつと微笑んだ。全く。笑わせるぜ。オレもここまで無謀人だったとはな……！

男がオレを押し倒そうと飛び掛ってくる寸前、オレは窓に向かって飛び込んだ——。

第三話「窮地……！」（後書き）

次回予告：次回、遂に主人公「鏡界」へ――？

第四話「マザー」

案の定、窓の先には灰色の世界が広がっていた。一面灰色一色。時折、ピカツと稲光のように周りが光る。オレはそのたびに目を瞬間的に閉じていた。どうやらオレは自由に動けるようだ。……そう、無重力空間って感じた。オレはその空間を一時、楽しむわけにもいかなかった。

「……つく」

だんだんと息が苦しくなってきたな。ふと、周りが白くなっている事に気づく。白い霧が立ち込めているような……。

「ようこそ」

何処からともなく声がした。透き通ったような女声。一瞬、ドキンとしてしまったオレは瞬時顔を赤らめる。しかし、どこにいる。声の正体は。

「……誰だ？ どこにいる？」

オレがそう問うと、その声はフツと笑い、話し始めた。

「私はマザー……。私は実在しない。形としては」

「ど、どういうことだ？」

「……今のあなたに話したところで何か意味があるでしょうか？」

確かにない。だが、

「そうだが……それより、オレは帰れるのか？ 元の世界に……。それにここは何処だ？」

「ここは『鏡界』。正しくは『鏡界の境界』ですが、それはいいでしょう。それをあなたに分かってもらう為には……まず、『なぜこの世界に来たのか？』から説明しなければなりません」

”声”は一旦間を空けてから、続けた。

「あなたがこの鏡界に来た理由……それは、あなたが『死』を恐れていたから」

オレが『死』を恐れていた――？

「あなたはそれほど意識していなかったでしょう……ですが、実際、あなたは誰よりも、強く『死』というものを恐れていた。例えば、こんな事はなかったですか？ ……『死』について考え込む……ということは」

確かに思い当たる。でもそれが……、いや、今はどうでもいい。

『死』を恐れていた……。

「つて事は……」

「そう、あなたはあの時殺されていた、はずだった」

「——はずだった？」

「そう。ですがあなたは運命に逆らい、『生』にしがみついた結果——この、鏡界へ行き着いた。人によって『生』へのしがみつき方はそれぞれ。私はそんな人たちを正しい世界へ導いているのです。ある人は水、ある人は木、ある人は……『鏡』。その中の一人があなた」

オレは息を呑んだ。まさか——。

「他にも居るつてのか？ オレみたいなヤツが」

「もちろん……おっと。私の役目はここまでですね。後は『案内人』からの説明があるはずです。私は、他の来訪者を導かねばなりません」

「え？ ちょ——」

突然、周囲が白くなった。オレは思わず腕をかざして目を閉じる。

光が弱くなつたと同時に、フツと、体が軽くなる。浮いている感じがする。その時、オレは目を開けた。あけた時に、体が地に着いた感覚がした。浮いていたのか——？ と、考えたところでオレは気づく。

「ここは……教会？」

周囲は教会のような、いや、教会そのものである。オレは後ろを振り向く。カラフルに装飾されたステンドグラスが光に煌き、オレを照らしていると同時に、教会全体に光の保養を与えている。

オレはもう一度後ろに振り返った。一人の女の人があるところに立っていた。シスター。まさにそんな感じだ。オレは思わず声をかける。

「あなたが……」案内人「——？」

彼女がゆっくり頷いた。

第四話「マザー」(後書き)

次回予告：『案内人』が導くもの——!？

第五話「案内人」

彼女にはシスター、それしかない。マザーが言う、『案内人』……コイツが。

「マザーからは聞きましたね？ なぜこの『鏡界』にやってきたか」
オレは頷いた。ふうむ。オレが冷静でいると思ったら大間違いである。窓に飛び込んでからコレだぜ？ 並大抵の人間じゃあ、普通じゃいられないってもんさ。オレだって、汗だらだらなんだぜ？ 冷や汗が。

「では私は、この世界を『案内』させてもらいます。幾分、正世の方たちにはなれない環境だと思いますので……。話はさほど長くないと思いますが、一応、こちらへ」

そう言つて『案内人』はオレを長い椅子に案内した。

「正世から来たあなたが——正世というのはあなた達の世界の事です——この世界でやなねばならぬ事……は、特にありません」

「えっ……ない？ じゃあなん——」

「今からでも戻りたければ戻れます。ですが、そこはあなたが鏡に飛び込んだ所、時です。つまり、あなたの場合は殺される……『死』を恐れているあなたが、死ぬと同然ですね」

オレは言葉に詰まる。『案内人』は淡々と続けた。

「ですから、あなたはこの『鏡界』であの時の死を引き伸ばせる事が出来るのです。特別に。この世界にやってくる……選ばれた者なのですから」

「じゃ、じゃあ、オレはいつになったらいいんだ？」

「いつでも。ご自由に。先ほども申し上げたように、戻った先はあの場所あの時。あなたが死にたくなければ、この『鏡界』で力を得、死を逃れる事……それが目的と言った方がいいでしょうか。……それで、いつ帰ればいいか、ですが……。正直、いつまでもいれるんですよ。この世界には。限りなどありません。何かが起こらない限

り」

「何か——？」

「この世界を壊すような事です。そんな事、起こるはずがありませんが……で、話を戻しますが、この世界では年をとらない。能力だけが身につく。分かりますね？」

オレは目を見開く。『案内人』が憫笑した。

「『死』を恐れていた者が『不死』になる……良い皮肉ですよ。……まあ、現実問題、そこまでいる人はいませんがね。大体、正世が恋しくなるんですよ。正世に戻れば自分は『死』を迎える……ですが、その頃には正世での『死』を乗り越えられる力がついているはずですから、なんら問題ありません。……が、いつかは死にますかね」

再び『案内人』は憫笑し、オレを見つめた。

オレは押し黙り、『案内人』を見つめる。視線があつた。オレはつい目線をそらした。

「あなたは自由です。さあ、あそこの扉をくぐれば、正真正銘の『鏡界』です。——ああ、言い忘れていました」

オレが立ち上がった時に『案内人』が思い出したように言った。

「あなたには『相棒』が現れます。すぐに。真っ先にあなたに話しかけてくる者……いいや、真っ先にあなたが目にする者が『相棒』です」

「『相棒』……」

そうオレがつぶやいた時、『案内人』がニコッと笑った。オレは『案内人』に手を振りつつ、扉へ向かった。

第五話「案内人」（後書き）

次回予告：『案内人』が言う、『相棒』とは――？

第六話「相棒」

オレは扉をくぐりぬけた。『相棒』、そう『案内人』は言つてたな。ぐるりと周りを見渡す。ふうむ。誰もいないようだ。周りは高くそびえる岩。……山か？ 谷のようなところにオレはいる。後ろを振り返ると今の協会があつた。オレは再び前に視線を戻す。明らかに人の手によって創られたかと思われる石の階段、そして両側には岩。まるで、くりぬいた山道のような構造になっている。

……どうすりやいいつてんだ。『案内人』は何も教えてくれなかつたな。そして正体不明の『相棒』……。オレは瞬きをする。とりあえず、ここを下つてみるか。

「スミマセン、ちよつと待つてくれませんか？」

背後から突然声が聞こえてきた。空耳か？ オレは後ろを振り返つてみる。そこに立っていたのは一人の男。さわやかな風体。表情何か考え深げな表情。第一印象、かっこいい。そうオレの頭にインプットされた。

と、同時に『案内人』の言葉がオレの脳裏に煌く。

——真つ先にあなたに話しかけてくる者……いいや、真つ先にあなたが目にする者が『相棒』です。

コイツが『案内人』、アンタが言う、『相棒』だつてのか？

オレがそんな事を考えていると、『相棒』らしきその男が話しかけてきた。

「もしや、あなたがボクの『相棒』ですか？」

男は目を細めながら聞いてきた。今まさにオレも、それを言おうとしたところだ。

「オレもその言葉、そっくりそのまま返させてもらうぜ？」

オレがそういうと、男はフツと笑った。

「ということは、どうやらあなたみたいですね……ボクの『相棒』は」

「『案内人』がそう言ってたのか？ 真っ先にお前に話しかけてくる人が『相棒』だ、って……」

「正確には真っ先に目にする人、でしたかね」

ふん、そんな事どっちでもいい。でだ。

「お前の名前は？」

彼はしばらく沈黙した後、名前を口にした。

「——ヒロ、でいいでしょう」

「でいいでしょう？」

「ええ。その理由はすぐに分かりますよ。あなたの名前は？」

……。なるほどな。そういうことか。はあ。どういふことだよ。

「分かん。思い出せネエ。だからか」

ヒロ、と言ったそいつは微笑んで頷いた。

「じゃあ——レン、でいい」

「分かりました」

ふん、自分で自分の名前を考えるのも面白いな。全く。すごい事になってるぜ。灰色の窓に飛び込んだらマザーっていう正体不明の声にあれやこれやと説明され、それが終わったと思えば『案内人』とやらにありたらこーたら説明され、んで次は自分の名前が分からなくなっていて、自分で名前を考える……。ああ、もうこうなったらどうにでもなれ。オレが空を見上げながら考えていると、ヒロが話しかけてきた。

「では、レン、行きましようか」

「行くって……どうすりゃいいんだ？」

そう、それだよ。はあ、また、説明を聞かされなきゃならんのか？ 「そうですね。『案内人』からボクからあなたに説明するように言われました」

はあ、ただでさえ暗記が苦手なオレだ。今日一日で、こんだけ説明されるとは、災難だぜ。

第六話「相棒」(後書き)

次回予告：ヒロと名乗る『相棒』、彼の口からでるものとは？

第七話「曇天」

ヒロ、ソイツの話によると、俺たちは本当に何もしくてもいいらしい。目的らしい目的はないという。

「ええ、『案内人』はそう言っていました。この世界では何もしくてもいい。ただ自分が正世の自分の『死』を逃れられるか——それが目的。簡単に言えば、強くなればいいんです」
なるほどな。

「でだ。今からどうすんだ？」

「とりあえず、この山から下りるしかないですね」
それはそうだな。

というわけで長い。何だこの階段……。まだ半分以上ありそうだな。まさか正世に帰る時これを上れていうのか？ ああ、先が思いやられるぜ。

「なあ、いつまで続くとか『案内人』に聞いてないのかよ？」

「いいえ、あなたこそ聞いてないんですか？」

オレはため息混じりに息を吐いた。つたく。『案内人』も適當すぎるんだよ。マザーも同じだってんだ……。

「やっと着いた……」

オレは思わず口走った。しかしやつと降りたぜ。

「さすがにキツイですね……。それにしてもこれだけの高さがあるところから降りてきたなんて、信じられません」

ヒロが額の汗を拭いながら言った。空はどんよりと曇っている。ちょうど至的溫度くらいでいい感じだ。オレは力なく笑う。

「ハハハ……」

目の前に広がっているのは果てしないかと思われる荒野。広い。地平線なんて始めてみた。そんな荒野にたたずんでいる一つの山――

―が、今降りてきた山だ。

ドサツとオレはその場に座り込んだ。息を吐き出す。ヒロも隣に腰掛ける。

「で、降りてきたはいいがこの有様だ。どうしてくれる」

「ボクに言わないでくださいよ……道がこれしかないから進んだだけなんですから。なんなら……もう一度上ります――か？」

「いいや、断固拒否する」

ヒロはですよね、と笑って呟き、曇天の空を見上げた。オレもそれに倣^{なま}う。

しばらくそんな体勢が続いた。

と、その時。

落雷のような空気の裂ける音がした後、雲が裂け、上で大爆発が起こった。

第七話「曇天」（後書き）

次回予告：突然の爆発、一体？

第八話「彼の名……！」

「な、何だあ?!」

オレは思わず声を張り上げた。ヒロは目を見開いている。空が、上で大爆発が起こったって……はあ? な、なんなんだよ。もう……! オレは思わずヒロに問うた。

「おい、どういう事だ?」

ヒロは首を振って、

「分かりません……『案内人』は何も」

そう言って、ヒロは立ち上がった。

「おい、どうするつもりなんだよ?」

空の大爆発……それが起こったところは、今は黒く霞んでいる。

「とりあえず、山に……」

「山? また上るのか?」

気が動転しているのは向こうもそうらしい。視線がまばらだ。

「くそっ……!」

オレはヒロの手を掴み、山に向かって走り出した。

もうすぐで山の階段に差し掛かるという所だった。

「待て」

後ろから声がする。ったく、これで二回目か? 後ろから話しかけられるのは——と考える暇はない。オレは悪態について声の主を見た。

——男。強そうな。服装はこれまたSFに出てきそうな宇宙艦隊の提督のような格好をしている。何者だ? まずい。

直感的にそう思う。

「ヒロ!! どうすりゃいい!!」

どうしたんだろうなオレは。

「分かるわけありませんよ!」

ヒロがこっちに向いて叫んだ。そりゃそうだよな。

「まあ、待て」

畜生、そう呟いてオレはヤツに向かい直った。

「お前は何モンだ？」

「ハッ、ハッ、ハ！」

う、何だコイツ。突然ゆっくりと笑い出したソイツは、ズンズンとこっちに向かって歩いてきた。オレはあわてて後ずさりをする。ヒロも同様に後ずさりした。ソイツはオレとヒロ、それと、ソイツとの距離が大体5mくらいのところで立ち止まった。

「ワシか？ よくぞ聞いたのオ！ いや、聞いてくれると思っていた！ フッフ、ワシはお……？」

やけに焦らすヤツだ。オレはすっかり勘が狂っちゃった。

「ワシはのオ……ハハハ！ ……天上の將軍とも謳われる——正確には謳われた、じゃがのオ。おっと、どうでもいい！ ええっと、そう、ガロンじゃア！」

……………。

あ——……。どう反応すりゃいい。こいつはオレたちにとって敵なのか？ で、名前は確か、ガロン？ 天上の將軍？ 一体何がどうなってるんだ。

とりあえずオレはゆっくり切り出した。ヒロは以前、ガロンとかいうやつを注意深く見ている。

「あー……えっと、それでガロンさ——」

「待ってください」

——あ？ 何だよヒロ、そう言おうとした時、そのガロンとやらは、オレたちの後ろに移動していた。

第八話「彼の名……！」（後書き）

次回予告：響き渡る怒声！！

第九話「ガロン」

「——え？」

オレは声を漏らした。ガロンとかいう男がオレの背後に立ちニヤニヤと笑っている。オレは反射的に振り向いた。ガロンが鼻息を大きく吐き出し、

「ふふん！ で、だなア」

何か説明し始める気らしい。オレはヒロを見た。彼は怪訝そうな目でガロンを観察している。オレは言葉に詰まった。

「おまいらア、ちよつくらオレに着いてこい！」

オレはヒロを再び垣間見た。ヒロもこっちを見ている。

「おう？ ほら、こっち来い」

ガロンは既に何歩か歩き出していた。何処へ向かう気だ。

「レン、ここは着いていきましよう」

「はあ？ コイツ、何するか分からねえんだ——」

最後まで言えなかったのにはワケがある。突然ガロンが怒鳴った。

「口を慎めエエイ！！！」

うつひやあああつ！ 耳がア……。

「このワシに向かって『コイツ』などとオ——」

うぐぐぐ……。とんでもない怒声だ。

オレは耳を押さえながらもがく。

「ヒロ！ ちょ——」

「やまかし——あ、違う、やかましいだっ——」

オレはもがいている最中に嘔きだした後、笑い出した。うぐぐぐ

……。ヒロは顔をしかめながらガロンを見ている。平気なのか？

ああ、オレみたいに間近じゃないしな……ハハハ。

「ああもう！！ とりやあつ——」

ガロンはそう言って（叫んで、の方が正しい）、何かをした。何かをした、というのも、オレはその頃たまたま下を向いていた。そ

れだけなんだが。ふうむ。後から思えば、確か両手を振り上げたような感じはしたな。

オレはハッと上を見上げた。周りは以前と変わらない。違うのは、『音』だ。何も聞こえない。いや、ヒロが何か呟く声とかは聞こえるんだぜ？ 待て、ヤツは何を呟いてる？ オレはヒロの方を向いた。

「あんな……まさか……こ……んな……？ ……なぜ……いつ……なかった……の……が……わから……あんな……あんな……どこで……？」

どういう事だ？ アイツがあんなに動揺する？ オレでもこんなに冷静なんだぜ？ アイツにしか見えない何かでもあるのか？

そしてオレはハッと気づく。ガロンがいない。

第九話「ガロン」(後書き)

次回予告：現れたもの……！

第十話「空船」

「ガロンはどこだ？　おいヒロ！！」

オレの張り上げた声にヒロはぴくつと反応し、オレの方を向いた。顔は青ざめている。一体、ヤツには何が見えたんだ？

「いえ……別に何も」

「何もないってことはねえだろ！　どうしたっていうんだ？　ガロンとかいうやつはどうか行くし、お前はやたらと動揺してる……。何があつた？」

「……………」

ヒロは無言で地を見つめている。

「おい！」

オレはそう言つてヒロの方へズンズン歩いていった。そして、ヒロの肩をむんずと掴みながら問いかけた。

「さつきはどうしてあんなになつてたんだ？」

「……『案内人』に言われたんですが」

——『案内人』？　また『案内人』かよ。どうして『案内人』はコイツばかりに説明するんだ？

「知りませんよ。『案内人』……彼女が言っていたんです」

「『あなた——』」

途切れた。大声があたりに響く。さつきから変に風の音とかがしないから余計にうるさい。くそ……ヤツめ、戻ってきたか。

「ハッハッハ！」

ソイツはまた大声で笑った。そう、もうお分かりであろうがガロンである。オレは声のしたほうを振り向く。

オレは口をあぐりと開けガロンを見た。いや、正確にはガロンの後ろに控えている舟、だが。オレはごくりとつばを飲み込む。デカイ。それに尽きる。SFとかで出てきそうな舟……。

ガロンがこっちに歩いてきた。

「コホン！」

ムダにデカイ咳払い。何だ、コイツこの舟の艦長か？ えらく偉そうじゃないか。

と、ヒロがガロンに話しかけた。ふうむ。確かにコイツが話しかければ無難だな。

「あなたは……何者です？」

待つてましたとばかりにガロンが鼻高々に話し始めた。

「ふっふーん！ このワシはのオ、この舟……いんや、まあ舟でいいか。正しくは『空船』つちゅーんじゃがなア……コ、コホン。この舟の……聞いて驚けエ……艦長なのじゃアっ……！！」

……………。

どうすればいい？ 諸君。どう反応すればいい。これ。

……しばらくの沈黙。あ、ヒロに言ってもらえばいいんじゃないか。ハハハッ。

……おい、ヒロー。……畜生が。

「あー……はい、それは大体姿から察しはつきますが――」

「何イっ！？」

「ああ、まあ、それだけ威厳があるという事……だと思えます」

「ああ、そうだろうな、そうだろ？ そう見えるだろ？ ハッハッハー！」

そう言ったらほら、もう照れてやんの。オレはヒロをちらと見る。ヒロはこっちを向いて微笑み、口を開いた。

「それで、ばく達に何の用ですか？」

「そうそう。ええつとだなあ……」

第十話「空船」(後書き)

次回予告：その用件とは……？

第十一話「鏡士」

「オレのお前らに対する用とは――」

コホン。そこでヤツは咳払いをした。何が飛び出してくる……？
こんな時は大抵が驚きの一句だ。……さあ、くる。

「鏡士の育成、だ」

ん？ この響きはどこかで聞いた事が……。

「キョウシ……？ モノを教える教師の事か？」
というオレの疑問にヒロが即答する。

「違います、鏡の戦士……と書いて鏡士、です」
分かりづらいな。しかしまた何だ。鏡士って……。

「さっき僕が言おうとしたのはこの事です。僕は鏡士である……
と言いたかったんですが。……もちろん、あなたもその鏡士ですよ」

……鏡士……。オレが？ でも一体何をやりやあいってんだ。
『案内人』、あんたヒロにだけ説明しすぎだぜ？ ……ああ、そう
か。オレはいまいち記憶力が良くないからな。

ガロンがさて、と呟いて、

「お前たちはこの――」

彼は後ろを振り向きそこにあるどこかい舟を見上げ、話を続けた。
「――空船に乗ってもらい、鏡士として活動できるようになるまで
育てる。まあそれがオレの目的だ」

鏡士としての活動……。一体何をすればいいんだ？

「それはまた後だ後。一気に話すとオ、こんがらがるかも知んねえ
しな。さ、ついて来い」

と言ったらすぐさま方向転換、そして空船とかいうのに向かって
歩いていった。オレはヒロに問いかける。

「おい、これは信じていいのか？」

「ええ、大丈夫です。『案内人』はそう言っていました」

「……お前の時の『案内人』はえらく親切だな」

「さア食え！　そして寝ろ！」

俺たちは空船に入ってすぐ食堂に案内され、豪華な食事を目の前にした。おおお。もてなしが良すぎる。ふうむ。このガロンとかいう人、割と信用できそうだな……と、飯で釣られるほどのオレではない。オレはしばし怪訝な目でその食事を見つめた後、ヒロに無言で聞いた。ヒロは微笑み、彼の前におかれたパン（らしきもの）をパクリとかじった。オレもそれに倣う。ふむ。なかなかいけるぞこのパン（らしきもの）。

ガロンはハッハッハと豪快に笑いながら食事をどんどん口にしていった。ほんと陽気な人だよ。

ふむ、やはり今日は疲れたな、と食事を食べ終わってから思う。今日っていつからだ？　この鏡界に巻き込まれたのが……16日の夜だっけか。で、それからあの山から下りて数時間……。さすがにこれはきついな。

オレは一つ欠伸をする。

ガロン率いる空船のスタッフの皆さんは結構気が利いていて、食事が終わる事を告げるとすぐさま寝室に案内してくれた。その寝室とは簡素なもので、ベッド、机、椅子、そして窓があるくらいの部屋だ。

ともかく、寝るか。オレはベッドに滑り込む。

はぁ、疲れたな。ほんっと。

あーあ。

第十一話「鏡土」（後書き）

次回予告…次回……レンとヒロが聞くものは？

第十二話「朝」

「ふあゝあ」

「十時まで寝るなんてあり得ませんね」

「普通だ」

「いえ、あり得ません」

「なぜだ」

「普通は七時でしょう」

「ソツチの方があり得んな。近頃の日本の高校生はそれくらいなんだよ」

「へえ。そうなんですか。僕の知ってる友達は全員八時には起きてましたがね」

「それはお前だからな」

「理由になってませんね」

「そうかい」

「そうですよ」

朝っぱらからこんな言い合いを交わしていたオレとヒロだが上記の通り、オレが起きたのは十時である。ヒロ曰く、「自分は七時におきましたけどね」。………ったく。オレは再びあくびをする。

「で、今日はどうすればいい」

「さつきガロンさんが後で来てくれって言っていましたよ」

「会ったのか」

「ええ、あなたが寝ている時に」

イヤミだ。これはイヤミだ。っけ！

というわけで！ ガロン………さんの部屋の前までやってきた。お、さすがに広々としている。警備も頑丈だ。さすが艦長！ ……さん。

ええい、もういい。ガロンはいかにも艦長の椅子らしきものにどっかりと腰掛け、何枚かの書類に目を通していた。

「おう、来たか」

ガロンは書類を机に置き、オレたちのほうに視線を移した。

「お前らにはいわゆる修行ってヤツをやってもらう」

「しゅ、修行！？」

オレはぼかんと口を開けヒ口を見た。いつも通りだな。アイツは。つか、なんて展開だよ。

「ま、待つてく……ださい。そもそも何で修行なんてしなくちゃいけないん……ですか？」

またため口になりかけた……。危ねえ危ねえ。っち。ガロンはニヤニヤしてやがる。

「ここに来たお前らは鏡士というのをやってもらうと言ったな」

「あ、はい。でも一体なにをすれば……？」

「うーんとな」

と言つて考え込み始めた。そんなに難しいもんなのか？ 鏡士とやらは。

はあ、また覚える事が多そうだ。

第十二話「朝」（後書き）

次回予告：「鏡土」とは……？

第十三話「バカ」

「お前らに定められた鏡士ってのはなあ、正世の言葉で言うところだ、戦士とか魔法使いっていうのか？ そんなんだ」

心の奥がうずく。戦士？ 魔法使い？ どういうこった。おれ達はそのままですごい事になってるのか？

「ああ、まーそういう事。それでだ。お前ら、なぜ鏡士にならんといかんのか、そう思っただろ？」

まさにその通りでございます。オレはそう言つと、ガロンは得意げに、

「ふっふーん。だろう？ そもそもこの鏡界には鏡魔カガミマっつーもんがおつてな？」

「鏡魔……ですか？」

「ああ。まあその鏡魔ってのは色々邪魔ものなんだな。この鏡界に住む者にとつて」

「え？ こつてもとから誰か住んでるんですか？」

「馬鹿かコイツ？」

ガロンがヒロに問いかける。畜生、明らか馬鹿にしてるだろ！

「ええ、この人馬鹿ですよ」

……くそっ！ この野郎め……！ なぜノる！

ガロンはニヤニヤしながら話を続ける。つたく。

「誰か住んでいなきゃオレはどうなるんだよ馬鹿。それにこの空船を動かしてる奴らも」

「ああ……そすね」

ぶっきらぼうに答えのが間違いだつたな。ああもう！

というわけでまた怒られ、というか怒鳴られた。日ごろ先生とかにため口なのがいけなかった！

そしてガロンは話を続ける。

「それで……もう分かるだろ？ お前らはア……その鏡魔を排除するっちゅーことだな、うん」

「で、でも……オレたちにそんな力があるとは思えないですよ？」

「大丈夫だって。なんとかなる」

……終わった。どうしてガロンが艦長なんだ！ 適等すぎる……。

それでヒロ、お前は どうしてそんなにニコやかな顔で聞いていられるんだ。もうちょっと気があう相棒がよかったぜ案内人……！

と心の中で嘆いていると、ヒロがガロンに聞いた。

「鏡士は正世から来た者だけが担うものなんでしょうか？」

「そうとは限らん。鏡界人だってやりたいやつはいる」

ん？ 待てよ？

ふと疑問が頭をよぎる。

「鏡界に住んでる人は年を取るんですか？」

「ああ。正世と鏡界の人は違う。正世から来たお前らは鏡界じゃあ育たん。逆に、鏡界人は正世では成長しない」

「そう……ですか。じゃあ、この世界に終わりつてのは来るんじゃ

——？」

「ああ、そうかもな」

「え——？」

どういうことだ？

第十三話「バカ」(後書き)

次回予告：ガロンが放った不可解な言葉。それに意味はあるのか――
し？

第十四話「二度目の……！」

ハテナマークがオレの顔に浮かんだ矢先、慌ててガロンは付け加えた。

「あつ、いや、そういう意味じゃない。ただ、終わりって事があるかもな、っていう事だ。この世界が壊れるだなんて、まずあり得ねえから」

だよな。ビビらせるなっぺんだ。

ヒロが再び口を開く。

「……では、これから僕達はどうすればいいでしょうか？」

「んー……そうだな。まずア、甲板に行ってくれや。甲板は鏡士の練習場の一つになっている。そこで指導してるディーナっていう男に事情を説明してくれ。そうした――」

落雷のような空気の裂ける音がその場を貫いた。オレは反射的に叫んだ。

「なっ、何だ!？」

襲撃か?! ヒロは目を見開き、あたりを見回した。

ドン!

ついオレはビクツとなってしまう。ガロンだ。そばの机を手で思いつき叩いたのだ。

「またかあのバカ野郎ツ!!」

そういうなり彼はズンズンと部屋を出て行った。畜生、オレたちはどうすりゃいいんだ。

「おいヒロ! どうする!」

「待ってください。あんな感じの音、前にも聞いたでしょう?」

「前? ……あの大爆発か?」

ヒロはこくりと頷き、すぐさままわれ右、ガロンを追っていった。オレもヒロに続く。

そこに広がっていた光景はまさに地獄絵のような……ものではなく、少々黒煙が立ち込めているだけだった。一体何が爆発したっていうんだ？ そこにいた何人かの人——鏡士見習い達は一人の少年を怒鳴り散らしていた。

「ばっか野郎！ 今日で二回目だぜ?!」

「あんな音出してくれたら、こっちの心臓が持たないんだ!」

視線を急いでめぐらせる。怒鳴っているのは四人。気づくとガロンもそこにいた。オレの隣にも一人いる。いや、こいつはヒロだ。ん？ その隣にも一人いるじゃないか。

背は高い、二メートルはありそうだが、その割には体は痩せ細っている。口には煙草を加え、殺伐とした雰囲気をかもしだしているこの男。ディーナとかいう奴か？

「どうすんだ?」

オレは怒鳴り散らされている奴を一心に見つめるヒロに呟いた。

しかしヒロからの返事はこない。どうした？

「おい、ヒロ!」

オレは不審に思っただけヒロをのほうに向いた。

「——ヒロ?」

彼は棒立ちしていた。怒鳴られている少年を見つめてた。どういうことだ。ヒロがこんなになってるのは二回目だ。前はガロンが現れた時……あやふやに何か呟いていた。今は硬直しているように呆然と突っ立っている。どうなってる。

「おい、ヒロ!」

オレはヒロの肩を掴んだ。ヒロは目を見開いて小さく呟いた。耳を傾けてなんとか聞き取れる程度の音量だった。怒鳴り声にかき消されていたところもあるだろうが、彼はこう呟いた。

「なぜ……知樹が……なぜここに?」

第十四話「二度目の……！」（後書き）

次回予告：驚愕の再会、そして真実！！

第十五話「知樹」

知樹……？

「おい、ヒロ、知樹って誰だ？」

ヒロの首から一筋の汗が流れ、オレはゴクリと唾を飲み込んだ。
ヒロの口が開く。

「僕の……>b<死んだ弟>/b<です」

言葉に詰まった。死んだ弟が、なぜここに？　っつーかコイツ兄だったのか。いや違う。どうした死んだはずの人がここにいるんだ？

「分かりません……それより……知樹……！」

そう呟いてヒロは危なげに歩き出した。向かう先は、少年が怒鳴られている所。どれが知樹って奴だ？　あの怒鳴られているやつか？　それとも周りの怒鳴っている奴らのうち誰かか……。

視界はすっかりよくなつたからここからでも顔がよく分かる。ふうむ。怒鳴られている奴はなんともヒロに似ている。……ああ、もうコイツだな、知樹とかいうのは……。

「知樹……！　知樹！」

ヒロはそう叫びながら歩いていった。怒鳴られている知樹ちきはヒロに気づいたか、ヒロのほうを向いて呆然としている。

「兄……上？」

周りにいたガロンその他の怒鳴っていた奴らは怒鳴るのをやめてヒロを見つめた。ガロンが眉間にしわを寄せていった。

「兄上？　お前ら兄弟なのか？」

ヒロはこくりと頷いた。ただし、おぼろげにだ。ヒロは知樹ちきに近づき、「知樹……」と呟いた。

「兄上！！　なぜここに？」

「お前こそ……なぜここにいますか？　知樹……お前は死んだはずなのに……！」

そうヒロが言った時、知樹の表情が変わった。驚きから、絶望へ。

「…………え？」

そう呟いたか呟いてないか、危なげだが、オレにはそう聞こえた。そして、ヒロの顔も変わる。

「まさか……お前！」

どういう事だ……。ヒロの弟は死んだ……。それはヒロが知っている。しかし知樹は知らない。ここは時空のねじれか？

「どういう事……？ 兄上……コレは一体？ 僕が死んだって……」

「知樹……、いいですか？ お前がこの世界に来た理由、それは死にそうになったから……。お前が死んだのは西暦2110年の事、敵の罠にかかって……」

知樹は絶句した。周りのガロンたちもあっけにとられてみている。オレだって絶句だぜ。それに……。2110年？ 待てよ。2110年って……。俺がここに来た時は2008年……。まだ100年も後じやねえか。ってことは……。ここは正世の時間とはまた違っているのか？ ……そうか、だからここでは年をとらない……。それに「敵の罠」ってヒロは言った。つまり——戦争？ まさかな。知樹が震える声で言った。

「つまり……僕は死ぬって……。どうやっても死ぬって事ですか？ ここで……。何をしたらって!？」

ヒロは呻いた。

「まさか知樹が鏡界に来てとは思わなかった……。ここに来た上で、死んだ……。なんて」

ヒロは驚愕の雰囲気をかもしだしていた。知樹は黙り、うつむいた。

「……………」

第十五話「知樹」(後書き)

次回予告：知樹の決断……？

第十六話「弱者」

しばらくすると、すすり泣きのような声が耳に届いた。

……泣いてるのか？ そりやそうだろうな。生きられると思ってここでやってきたのに、突然「お前は死ぬ」なんていわれたら……。しかもそれが実の兄に、だ。……もしオレがあの時殺される運命にあるのだとしたら——ええい、そんなこと考えたくもねえ。

「おい、知樹とか言ったか？」

知樹はしゃくり上げながら頷いた。

「何だ、その……未来は変えられるって言うだろ？ だったら——俺が言葉を止めたのも知樹が何か呟いているからだった。

「……えられない……>b<過去は変えられないんだ！！>/b<」
そう聞いた時、オレは言葉に詰まった。……そうか。そうだったな。畜生が。

「でだ……どうする気だ？ 正世へ帰るのか？」

オレ達は再びガロンの部屋に戻ってきた。知樹が「正世へ帰る」と言いだし、ガロンが部屋で話をしようと言い、ヒロがついていき、相棒であるオレがここににいるというわけだ。

「はい……」

無言のひと時が過ぎる。沈黙を破ったのはオレだ。

「……正世に帰るって事は、死にいくって事じゃないのか？」

「そうですよ？ ……知樹、もう少しここにいて……」

「ここにいたって死ににいったって一緒です……だったら兄上……僕はさっさと死にたい！！」

待てよ、死にたいって……。

「死にたい……？ お前何考えて——」

「ふざけるな！！！！」

ヒロ……？

「お前はそれでも……それでも——」

「灯家の一員だと？」

灯家……？ 知樹は今そう言ったな。どこかの一族かい？

「そうです。僕の一族ですよ。死にたい……灯家では禁句とされているはずでしょう！？」

ふん、最もなしきたりだな。

「もう死ぬんだからいいでしょう！？」

その知樹の言葉にヒロはキレたようだ。表情が変わった。

「……なら、死になさい。お前みたいな弱者は死ね！ 灯家にそのような人物はいりません！」

「おい、いくらなんでも言い過ぎじゃ——」

「戦争とはそうなんです！！ 覚えておきなさい、レン！ 人類は2015年から20年に、そして2099年からずっと、2114年まで！ ずっと戦争をするのです！！」

オレは硬直した。まさか……嘘だろ？

第十六話「弱者」（後書き）

次回予告：レンに明かされた戦争の真実！
それは……？

第十七話「真実」

「戦争……？　おい、それってマジかよ？」

信じられない。嘘だろ？

「本当です。実際に起きてるから言ってるんじゃないですか。簡単に言えば二回……」

「じゃ、じゃあ日本は……日本はどうなるんだ？　まだあるのか？」

「大丈夫です、日本はまだ……」

「おい、そっちの話は今はいい。今は、ゴウを」

ガロンが口を挟んだ。っち、また後だ。……ゴウっていうのは……

……知樹のここでの名前の事か。

「どうするんだ？　ゴウ」

「僕は正世へ帰ります」

「……そうか。ならオレは止めない。たとえ、お前が正世で死のうが、生きようとな。こっちの知った事じゃない」

ガロン……お前が鏡士として知樹を導いたんだろ？　それなのに何だそれは……。今まで知樹をここで看てたんじゃないのか？　「

帰る」って言った途端、それかよ。ったく、わからねえ。オレは黙ったまま、頭の中でガロンに文句を言っていた。

「それじゃ、ゴウ、明日朝、またここに来い」

「分かりました」

いいのか？　こんな簡単で。オレはヒロを振り返った。ヒロは無言でうつむいていた。ここからでは口辺りしか見えない。だが、ヒロは唇を噛み締めていた。オレもつられてうつむいた。

「なあ」

オレはふとヒロに問いかけた。

「これでよかったのか？」

ヒロはおれの寢室に戻ってからずっとベッドに仰向けに倒れ、目

を腕で覆っている。寝ているのかと思ったくらいだった。

「まさか……」

言葉の終わりに少し笑ったような感じはしたが、オレは気にしなかった。

「よくないんだろ？」

「……」

ヒロは無言だったが、オレは続けた。

「知樹を止めるか？」

「……はい」

「そう言うと思ったぜ。兄上だってんだからな」

「……ハハ」

オレは立ち上がって寝室の扉の前にたった。ヒロが起き上がる音が聞こえる。それと同時に、扉を叩く音がした。

「誰だ？」

扉の向こうから声が聞こえる。

「……あの……ゴウです」

第十七話「真実」（後書き）

次回予告：知樹〓ゴウが訪ねてきた理由は……？

第十八話「戦争」

知樹を部屋に入れたのはいいが……気まずいな。ここは、二人にするべきか……。

オレはそう思つて部屋を出ようとした時、ヒロが止めた。

「あなたはここにいて下さい。説明する事があります」

オレは黙つて従つた。その場に座る。知樹もオレの横に座つた。

「……さっきは、すみませんでした」

ヒロがベッドに座りつつ呟いた。

「いや僕が悪かつたんです。灯家の一員なのに……あんなことを言つてしまつて」

「『案内人』が言つてました。この世界に来てまもなく、あなたは死と直面するでしょう——と。僕は自分の死だと思つていました。それが……まさか自分の弟だなんて。それに、それが正世での死を意味するとは……全く」

「……………」

知樹は無言でヒロの話に耳を傾けていた。

「それと、レンも違う時代の人物だとは思つてもいませんでした。レンにとっては僕たちは未来人……。この鏡界は正世の時間とは全く違う。つまり、何千年も前の人物も、何百年後の人物もいるかもしれないという事です。だから……僕と知樹、そしてレンが同時に存在する……………」

なるほど……そういう事か。だから戦争が起こるってわかつたのか……まで、戦争といやあ……。

「戦争はもう終わったのか？」

「はい、四年前……丁度知樹が死んだ後にね」

「僕が……死んだ後に？　じゃあ僕の任務は成功……………」

「任務…………？　おい、ちょっと待てよ、話についていけないぜ？」

「ああ、すみません。どこから話せばいいでしょうか……どうせな

ら、2008年のアメリカの話からですかね」

2008年だと？……こ、今年じゃねえか。何が起るってんだ。

「2008年、中国の内陸部で暴動が起こり、当時行われていた……北京オリンピックは中止になりました」

待て、北京オリンピックは……まだ中止にはなつてない。じゃあ、残りの日に——？ ああ、こんな事考えたくもねえ。

「そしてさらに、アメリカ都市部で急激に……なんといいますか、警察国家化が進み、都市内部と都市外部で内部抗争が発生」

な、何だつて？それにアメリカで内部抗争？

「ええ、つまりはアメリカの内部で戦闘が起こるわけです。そして……その翌年、2009年にはアメリカ初の女性大統領が誕生しました。その後、中東の国同士で、核兵器による戦闘が活発化しました」

「そ……そんな…嘘だろ？」

何だよ……どいつもこいつも信じられない事ばかりじゃねえか……核戦争？

「はい、信じられないも何も、これが実際に起こった事です。そして2012年、内戦が原因でアメリカ合衆国が解体されましたが、翌年にはアメリカ連邦帝国が建国されました」

「アメリカ連邦帝国……！！」

オレはもう言葉も出なかった。オウム返しに聞くことくらいしか出来ない。

「そして……2015年、ロシアがアメリカに核爆弾を投下しました」

第十八話「戦争」（後書き）

次回予告…ヒロの口から出される戦争の真実……！

第十九話「説得」

「核爆弾……？ ロシアが……アメリカに？」

ヒロはすました顔で頷いた。

「全て現実で起こった事です。いや……あなたにとっては起こることですよ」

知樹は黙って二人の対話を聞いていた。ただ、その目はどこかを見ているかのようにだった。

これから、戦争だって？ バカな。待て、日本は……参加するのか？

「日本ですか？ その後に台湾と韓国と共に中国と併合されました」

「でも……お前はさっき日本は大丈夫だって……」

「はい大丈夫です。一連の戦争が終結した後、中国から外れ日本としてあります」

「……そうか、よかった……戦争はいつ終わるって言った？」

「2020年です」

オレはため息をつく。オレは元の世界に帰って生き延びたとして、戦争と直面する羽目になるのか？ そんな……どっちにしろだめじゃないか。畜生。運命ってのはひどいもんだ。

「そうかも知れませんか」

ヒロはそう言って知樹を見た。知樹はうつむいている。

「戦争の事はもういい、これ以上聞いても驚くだけだ。悲しくなってくる。」

「そういうと思いましたよ」

ヒロはそう言って俺を見た。ん？ 知樹の事だな。

「お前から言ってやれよ。お前の弟だろ？」

「そうですね」

ヒロは再び知樹に向き直った。

「本当に正世へ帰るのですか？」

「はい、兄上」

「正世へ帰れば死ぬ事になるのですよ？」

「いいんです、任務が成功したのならば本望です」

「いつ帰ってもいいじゃないですか！」

「だからもう帰るんです。ここで無駄に時間を過ごすなら……」

「無駄ではないでしょう！？」

「何ですか？ 僕が死ぬ事は決定してるのに？ 何をどうやっても死ぬのに？」

「……っ！」

ヒロは面喰らいつつも「そうでしたね……」とつぶやき、再び口を開いた。

「灯家の宗主……トモシヒアカリ灯火明利はかつての太平洋戦争で大きな過ちをおかし、深手を負いつつも日本に逃げ帰ってきました」

何だなんだ？ 今度は灯家についてのお話か？ やめてくれ、これ以上覚えられそうにない。

と、俺は嘆いたものの、ヒロはかまわず話続けた。

「しかし、彼はその失敗のせいで日本軍の者たちに追われていました。そこで、彼は名前アカリミサキを変え、偽名ですね。彼は灯三咲としました」

「女か？」

「男です。女装までしたんですね。」

「女装って……そこまでして？」

マジかよ。一体その人は何やらかした？

「もつと彼は自分を隠そうとしました。なぜか……。そして彼が受け持った任務……それはアメリカの軍艦から秘密兵器の計画を盗む事でした」

第十九話「説得」（後書き）

次回予告：灯家、その任務の真意！？

第二十話「灯家の家訓」

「秘密兵器？ まさか……原爆の事かよ？」

はい、とヒロはうなずいた。嘘だろ？

「もし、原爆の事が彼によって漏れ出していたら、日本はアメリカに負ける可能性は低かったでしょうね」

「なぜそう言い切れる？」

「僕の独断ですよ。気にしないでください」

そう笑う。

「それで、どうしてお前の一族の話になってる」

「……そうですね。またあなたには今度でいいでしょう。今は知樹に対して言いたい事があつたんです」

全く、遠まわしに言う奴だな。何だ？ 灯家の家訓でも教える気か？

ヒロは知樹の方を向いて言った。

「知樹、灯家の家訓を全て答えなさい」

なんとその通りだった。家訓……オレの家にはなかった、はずだ。うん。

「え、あ、はい」

知樹は少々戸惑いながら答えた。家訓は全部で三つらしい。彼が言うのはこんなものだった。

一、死を助長するような事は言わざるべし。

二、我慢しろ。

三、やるべし事は全うせよ。

「……以上のはずです」

なんともありきたりな家訓だな。まあ、言ってるが。ヒロはうなずいて、

「ええ、確かにそうです。ですが、あなたはもう一つの家訓を知らない」

「……え？」

なんとまあ。兄だけが知っている秘密ねえ？　なんていうか、なあ。

「これは代々の長男にだけ伝承される家訓です。本来ならば弟などに教えてはいけないのですが……」

「ならどうして今さら？」

と俺は問う。ヒロはフツと笑って答えた。

「どうせ知樹は死ぬのでしょう？」

第二十話「灯家の家訓」（後書き）

次回予告：ヒロの放った言葉にレンが……！！

第二十一話「四つ目の家訓」

「なっ……」

オレは目を見開いた。そして体が動く。

「お前……ッ！」

ドカッ。

「うぐ……ッ」

オレは自分の握り締めていた拳を見た。そしてヒロへと視線を移す。ヒロは頬を押さえながら呻いている。

「ヒロ……お前」

拳を強く握り締めた。そして叫んだ。

「どういう事だ……！」

そう叫んでいるところに知樹が口を挟んだ。

「いいんです！ どうせ僕は死ぬ……！ 兄上の言うとおりだ！」

「なっ……！ お前ら……一体……！？」

荒い息遣いが耳に届く。……オレの息遣いか。畜生が。百年後の奴らはみんなこうなのかよ……！

「気にしないでください。ちょっと言い過ぎました」

ヒロが体勢を整えながら言った。オレは悪態について座った。何だよ。くそが……。

「それで、四つ目の家訓——それは、『死を求めし者は死に誘え』」
「『死を求めし者は死に誘え』——？」

知樹は目を丸くして聞いた。オレは少タイラつきながらヒロの話聞いていた。

「はい、つまり、『死にたい奴は殺せ』って事です」

オレは煙たい表情から一気に驚愕の表情に変わっていった。知樹も同じだ。驚きを隠せないようである。

「家訓の一つ目を破ったらそれ相応の罰を受けよ、という事だと思えます。それと、死にたいならば殺してあげる——宗主はそう考え

たのでしょうか」

「なるほど……。そういう事ですか。なら、殺してください。今ここで僕を」

オレは知樹を見た。知樹は目を瞑って正座をし、手をひざに置いていた。

「おい……何やってる」

コイツ……ヒロもヒロだぜ。まさかここで知樹を殺す気か？ ヒ

ロは首を左右に振った。

「いいえ、殺しません。いや——殺せません」

「……え？」

知樹はふつと目を開けた。

「実の弟をこの手で殺す？ あり得ませんよ……」

そりゃそうだろうさ。無理に決まってる。

「だから……お前にはここに残ってもらいたいです。僕が……お前を殺したくなんかないから……」

「……………」

知樹はうつむいた。オレはじつと知樹を見る。

「いや、」

知樹がうつむいたまま呟いた。ヒロに戸惑いの表情が浮かぶ。

「やっぱり僕は正世へ戻ります。それこそが家訓に従っていると思うんです」

第二十一話「四つ目の家訓」(後書き)

次回予告：遂に届くか、ヒロの想い！！
知樹の決断とは……？

第二十二話「知樹の決断……!!」

「『死を求めし者は死に誘え』。僕は死にたいと思っている。だったら正世へ戻って死ぬべきなんだと思います」

知樹はそう切り出した。まあ言えてるな。ヒロは驚きを隠せないのか目を見開いている。

「……そうですね。それが一番いい手立てかもしれませんが」

「おい、ヒロ……」

「ですが、何も今いなくてもいいじゃないですか？」

オレは極力黙って二人の対話を聞く事にしよう。いまさらだが、これは二人の問題だ。

「いや、いいんです。死ぬ覚悟は出来ています」

「……!」

ヒロの顔に戸惑いと驚愕の表情が順に表れた。ヒロは小さく笑って言った。

「どうやら何を言っても無駄のようですね」

「そんな……」

「どっちにしろ、決めるのは知樹ですけどね。明日の朝、ガロンの部屋へ行つてどう答えるか」

「……そうだな」

「でも、本当に戻るんですか？」

知樹はしっかりとした眼差しでヒロを見ていた。

「はい。では、僕は部屋に戻ります」

ヒロは溜息をついて言った。

「もう本当にこれ以上何を言っても無駄のようですね。もういいです。知樹、お前の勝手です」

知樹は頷き、扉を開け、この部屋を去っていった。

「オレはもう何も言わないことにした。お前ら兄弟のことはお前ら

で決めてくれ。もちろん知樹には留まっ^ていて欲しい」

「はい」

ヒロはそう答えたものの、やはり少し気が重いのだろうか。少し、そっ^としておくか。

オレは部屋を出た。

深呼吸をする。

「はあ」

あゝあ、色々話を聞かされて疲れたな。ちょっと散歩でもしてみるか。

そう思い、オレはポケットからガロンにもらった館内の地図を広げた。ふうむ。ここは寝室ばかりのようだな。このまま真つすぐ行って……右に曲が^つてず^つと行けばガロンの部屋に行き着く。……ガロンに用はない。まあいい。適等にいこう。

第二十二話「知樹の決断……!!」(後書き)

次回予告：知樹の答え……!?

第二十三話「テレポート」

唐突だが思った。ヒロの本名って何なんだろうな。今度知樹に聞いてみるか……。灯なんとかってのは確かだ。灯知樹……が知樹の名前か。

オレはあの後、しばらく艦内を見学してから部屋に戻った。戻ってみると、ヒロは自室に戻ったらしく、訪ねる気もなかった。オレは部屋で夕食まで待つ事にした。

ふう。思えばここに来たのは昨日だっけな。ハハハツ、色んな事があつたもんだ。あの男に殺されそうになったと思つたらマザーとかいう”声”に導かれ、『案内人』に色々説明され、ヒロに出会い、ガロンと出会い、ここに来て……。知樹にあつた。そして今こうだが、あの時オレは窓に飛び込まなかつたら……。殺されてたんだ。たな。助かった。オレがある意味無謀で。

オレはベッドに寝転がる。あーいつもなら携帯でもいじってる時間だな。しかし携帯はない。あの時ちょっと出るからと部屋に置きっぱなしだったんだ。合つたとしても繋がらないか。

何考えてんだろ、俺。

さあ、翌日！

オレとヒロはガロンの部屋に来ていた。もちろん、知樹もだ。今日はヒロに起こされて早いうちに起きている。あー、ちよつと眠いが、そんなことは言つてられない。知樹はやっぱり帰るきらしい。

「……帰るんだな、ゴウ」

知樹は頷いた。そして、ヒロを振り返った。

「兄上……」

そして、再びガロン^{シンザン}に向き直る。

「じゃあ、お前を神山^{シンザン}へと送る」

シンザン……。あの山の事か。

「はい」

すると、ガロンは立ち上がり、部屋を出た。オレたちは無言で着いて行く。

オレたちが連れてこられたのは、小さな部屋だった。人間が一人分立てる程度の大きさの台がある。何に使うんだ？ アレか、テレポート用とかそういう系か？

「その通りだ、……レン」

当たった。というか考えれば分かる。

「知樹、お前をここから神山の入り口までテレポートさせる」

ヒロは無言のままだった。オレは問う。

「どうして上ではないのですか？」

「その山に登りきるのが最後にやるべき事だ。なァに、自分の力で登れりゃいいんだから、鏡術を使ってもいいからさっさと登れるだろうさ」

キョウジュツ……、この世界での魔法ってところか。どうせそんなんだろうさ。

「はい」

ヒロが深呼吸する音が聞こえた。やっぱ、緊張してるのかな。オレだって……胸は高鳴っている。

思ったんだ。「死ぬ覚悟が来ている」——矛盾していると思わないか？ この世界に来た理由は『死』を恐れていたからだ。なのにアイツはここで「死ぬ覚悟ができている」なんて言った。……『死』を恐れているんじゃないのか？ まて、こうとも考えられる。この鏡界で知樹は『死』に打ち勝つためにがんばってきた……つまり、最終的に『死』を恐れないようになったわけだ。きっと、自分に降りかかった『死』をくつがえせる——そう思ってたんだ。ヒロにああ言われたけど最終的に自分を信じたんだな、あいつは。この世界に来た目的を果たしたんだな、結局。

それでいいと思うぜ、知樹。

今、知樹は静かにテレポート装置の上に立っている。目を瞑って。

第二十三話「テレポート」(後書き)

次回予告：正世へ戻る知樹、そして……！

第二十四話「神山へ」

「じゃあ、いくぞ」

ガロンの指がスイッチへと伸びる。

「はい」

知樹は目を瞑ったまま答えた。ここまま開かないつもりなのか？
それもありかもしれない。だが――。

「待ってくれませんか？」

オレじゃない、ヒロだ。しかしガロンはスイッチを押してしまつたようだ。知樹の体が白く光る。

「あつ……」

ヒロが呟いた。そしてそれと同時にヒロの体は動いた。そして知樹の腕を掴んだ。オレは小さく動揺の声を漏らす。

そして次の瞬間、二人が消えた。

オレはしばらくの間言葉をなくす。嘘だろ？ ガロンも悪態をついた。

「あのバカ……」

何やってんだ、あいつ！ 知樹と一緒にテレポートしちゃったぜ？
なんてこった。

……ふん。仕方ない、こうなったらオレも行くしかないな。

ガロンは割りと驚いた様子だった。

「な、お前までだア？ どういう事だ」

「オレはヒロに着いていけないといけません」

「なぜだ？」

なぜって？ そりゃあ……、

「……ヒロは、オレの『相棒』だから」

ガロンは諦めたような表情をして、頭を横に振り、言った。
「そこに立て」

「……はい」

装置に立つ。テレポートって、一体どんな感覚だろうか。今までファンタジーの世界だけだと思っていたテレポート。まさかこのオレが体験するとはな……。ガロンがスイッチを押した。それといった感覚はない。ただ、目の前がちかちかしている。それと同時に、少し寒気が体中を這う。

そして、次に瞬きをした時、オレはあの殺風景な荒地のど真ん中に立っていた。

第二十四話「神山へ」（後書き）

次回予告：次回、遂に第一部最終回！！

最終話「最期」

目の前にヒロと知樹がいる。二人並んで神山とやらを見上げていた。

「僕がここを降りてきたのはつい一昨日の事でした」

「僕は……二年くらい前の事です」

オレは二人に歩み寄る。すると、知樹が一步前に踏み出した。

「もう、行くのですか？」

ヒロが呼びかけた。知樹は頷いた。

「はい、今からこの神山の頂の教会までテレポートします」

「分かりました」

あ……そうか。

ふとオレの頭によぎった物があった。それは、オレを安心させた。確信があった。

「……言い残す事はないのか？」

ヒロは頷いた。知樹は呪文のようなものを唱え始めた。と、知樹の体が白く光り始める。さっきと同じだ。

「知樹……ッ！」

ヒロが近寄る。今、まさに白く輝いてテレポートしようとしている知樹が叫んだ。

「だめです！！ 兄上まで頂へと飛んでしま——」

しかし、叫びの途中で知樹の姿は消えた。わずかな残像を目に残して。

なんていう最期だ。兄との別れがこんなだったな。……ありがとう。

「知樹……最期までドジでしたね」

「最期まで？」

「知樹は、生前もよくミスをしていました。だからこそ、死に掛けたっていうのもありますけど」

あ、だからあの爆発……。

「それもだと思えます。知樹の生まれつきの特徴ですよ。……知樹らしい最期でちょっと安心しました」

そうか。オレはふつと微笑んだ。

「ならもつと安心させてやるよ」

「——え？」

ヒロはオレを振り向いた。

「パラレルワールドって知ってるか？」

「パラレルワールド……？ 並行世界のことですか？ 例えばこの鏡界のような……」

「そう。他に言つと、歴史にはいくつもの分岐点があるって事とかだ」

やはりヒロは察しがいい。オレが言いたい事をすばつと言い当てやがった。

「つまり……知樹が生きているという未来……過去もあると？」

「その通り。お前はたまたま知樹が死んだ道を行っただけだ。知樹は、生きるさ、きつと」

ヒロは空を見上げた。オレもならつて空を見上げる。見上げた空は、蒼空だった。

「あり得ませんね……そんな事、21世紀前半の考え方ですよ」

そう言いながらも少し笑っている、ように見えた。

「ふん、とにかく」

オレは一呼吸おいてから言った。

「オレは信じるぜ、パラレルワールドがある事を」

最終話「最期」（後書き）

終わりましたね。

今までありがとうございました。

二部はブログ（<http://narutomusicing.blog.fc2.com/>）で公開中です。その内ここにも載せるので楽しみにw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155f/>

鏡界の境界

2010年11月28日18時25分発行